

認知症地域支援推進員の活動実績報告会（開催報告）

日時：平成25年7月22日（月） 14:00～16:00

場所：三重県吉田山会館 第306会議室

出席者：四日市市介護高齢福祉課	位田信子さん
東員町地域包括支援センター	葛山秋代さん
津市地域包括支援センター	青木啓子さん
津中部西地域包括支援センター	見田佳奈子さん
玉城町地域包括支援センター	野口美枝さん
三重県長寿介護課	中川

内容

1. 個々の活動状況報告

◆東員町（東員町地域包括支援センター）

- ・「推進員」というと一般の人からは何をやる人なのか分かりにくい。「連携」の方が「つなぐ」というイメージで分かりやすい。
- ・認知症疾患医療センターに所属し、週2回地域包括支援センターに出向している。病院に所属しているため、医師やワーカーとはうまく連携できる。
- ・推進員について周知するため、4月、東員町の広報誌に掲載した。その効果で、4月は新規5件の相談があった。
- ・東員町は人口約25,000人。かかりつけは10病院くらいある。うち、認知症協力医院として6病院が引き受けており、年2回連携協議会の勉強会に参加してもらう。
- ・「家族介護相談会」は9月で3年目となる取り組み。7、8人の参加で、固定5人。
- ・老人会とは別に65歳以上の人を対象としたサロンを毎月開催。参加は30～50人。サロンの参加補助として、一人500円支給している。包括と町の予算から支給しているが、予算の関係で25年度からは一人100円徴収することとなった。サロンの内容は、認知症の話はひと通りしたため、最近は「熱中症」「高齢者の健康管理」、薬剤師による「風邪薬の飲み方」等のテーマで60～90分の話しをしている。予防教室や介護保険の話は繰り返し行わないと、なかなか自分のこととして頭に入っていく。推進員としては、企画の手伝いをしている。参加者が飽きない企画として、魚釣り名人に鯛をさばいてふるまってもらったり、タケノコ掘りに出かけたり、年4回血圧や骨密度の測定をしている。
- ・25年度は、小学5年生を対象に6つの小学校でキッズサポーター養成講座を開催している。（講師や企画は、キャラバン・メイトで組織する「オレンジハートの会」が担当）
- ・民生委員と信頼関係を密にすることで認知症支援がスムーズにいくと実感している。推進員として団地地区を担当し、地区内の民生委員と連携をとっている。

◆津市（津中部西地域包括支援センター）

- ・津管内には9つの包括があり、社会福祉法人が市から包括委託を受け、その委託内容の中に推進員事業が盛り込まれている。

- ・積極的に推進員の周知は行っていない。
 - ・こころの医療センターの家族会があり、9つの包括が持ち回りで参加している。
 - ・三重大学認知症医療学講座の事例相談会に参加している。
 - ・基幹型認知症疾患医療センター（三重大学）が今年度から取り組む家族会「えそらカフェ」に参加している。必要に応じ、地域につなぐ役割を担う。
 - ・法人内で、地域住民を対象に認知症をテーマにサロンを開催し、講師を担った。（出前講座）
 - ・24年2月、介護事業所職員（ケアマネが主）を対象に嘱託医に認知症の話をしてもらった。（約50人）
- 25年度は、専門職だけでなく、地域に出向いて一般の人を対象にした研修を実施したいと考えている。

◆津市（津市地域包括支援センター）

- ・保健師と推進員を兼務している。
- ・21年度から推進員の養成に取り組んでいるが、人事異動等により活動が定着しない。昨年度ようやく専門職向けの研修会に取り組むことができた。
- ・活動は津中部西地域包括支援センターの内容と同じで、基幹型認知症疾患医療センターの事例相談会に出席し、多職種連携のつなぎ役となる活動をしている。
- ・生活介護支援サポーター（ボランティア）を養成し、サポーターの支援メニューと地域のニーズ（してもらいたいこと）をマッチングしている。

◆四日市市

- ・2年前にコーディネーターとして市に配属となった。
- ・25年度から推進員ではなくなったが、認知症に関する相談に対応している。
- ・25の在介がメインだが、ランチで看護師を4カ所に配置し、医療的な援助を行っている。
- ・3つの包括が持ち回りで、勉強会等を開催している。認知症サポート医も参加している。
- ・サポーター講座は広がっている。推進員として、視覚障害者を対象に予防の話「認知症にならないためには」をしたり、講師の手配をしている。
- ・サポーターのフォローをどうするかが課題である。2つの在介で、フォローアップ研修として、地域の実情を知り、具体的な支援方法を考える内容で実施した。修了後、ボランティア登録へのつなぎはしていないが、自主的に見守りや生活支援サポートをする人が現れている。
- ・まだまだ「認知症の人が自宅にいるのは困る」という声も近隣から聞かれ、啓発普及をしっかりと必要性を感じている。特にマンション住人の理解を得ることが難しい。
- ・見守りネットワークのなかで、警察の協力を得られる体制ができている。また、各地区の運営協議会を月1回開催し、情報を共有する土台はできているので、今後はより深めていきたい。

◆玉城町（玉城町地域包括支援センター）

- ・保健師と推進員を兼務している。
- ・玉城町は4地区あり、全人口約15,000人。自治区が小さく取り組みがしやすい。地域の絆を大切にしている。
- ・町としては15年度から取り組んでいる。専門病院がないこと、家族介護の事例で、ケアマネがこれは虐待なのか、行き過ぎた介護なのか分からず悩みを持っていたこと、要介護3、4が多いことなどが背景にあり、認知症の早期発見・診断、適切なケアに結び付けるために取り組みを始めた。
- ・サポーター養成は、国が17年度から始めたが、玉城町も18年度から取り組んでいる。認知症の人のために何かしたい人向けに、フォローアップ研修を実施している。グループホームで体験研修をして、考えてもらう内容。
- ・20年3月、自主活動グループ「さくら」を発足。当初21名から現在は130名登録。実活動日数は延べにすると年間1000日を超える。
サポーター講座を主催。また、施設支援として外出や行事の付き添い、夏祭りに家族のいない人に付き添うなど6施設から依頼がある。
介護予防事業の参加者を自宅への迎えから教室での付き添いまでを行う。
「さくらショー劇場」として、地元の「たまチャンネル」で活動内容を放送してもらった。

個別支援は、「さくら」に依頼が入る。少し困ったことがあると「さくら」から包括に連絡が入るが、「〇〇で困る」というのではなく、「どんなことをさせてもらったらいいでしょうか」という言い方。

認知症初期の孤立しやすい時期に、「さくら」がフォローする。

24年度、「さくら」の取り組みとして、地域の徘徊模擬訓練を実施した。「認知症の人が自由に徘徊できる地域」を目的としている。模擬地区には、事前にサポーター養成講座を行い、「なぜ徘徊するのか」を学んでもらった。チーム編成で地図を持って、声かけ訓練を行い、訓練後、振り返りを行った。

25年度は、もう1地区で模擬訓練をしてから、全体へと広めていきたい。

- ・「さくら」では、認知症の人の家族カフェをやりたい。食事をしながら情報交換をして、だれでも集える場にしたい。「さくら」の取り組みは、初めフォーマルなサポートの代替えとして、服薬管理、犬の散歩、靴屋の客など行ったが、フォーマルをインフォーマルサービスで代替えするのは難しかった。そこで、認知症の本人ではなく、その家族支援をするということで、傾聴研修を「さくら」で実施している。
- ・24年度、運動は予防になるということで、「やわらかクラブ」を各地域の公民館で開始した。公民館でするには何が必要かをまず考え、パイプいすを無償貸出した。滑らないように底にテープを貼った。
月2回実施、1地区20~25名参加。参加者の一番若い人で73歳。それより若い人は運営側を担っている。

「健康しあわせ委員」を町長委嘱している。しあわせ委員とサポーターさくら、老人会、

民生委員が運営側に入っている。今後、運営側をどう増やして体制を整えていくかが課題。

- ・認知症のケースは、すべて推進員に情報が入ってくる。当事者はどうしても目先の事象、困りごとに対応が追われるため、推進員として第三者的にセンター方式でアセスメントを行い、原因を探る手伝いをしている。